



TITLE:

17世紀イタリア小説と歴史 --ジョ  
ヴァン・フランチェスコ・ロレダ  
ーノ『ディアネーア』を巡って--

AUTHOR(S):

片山, 浩史

---

CITATION:

片山, 浩史. 17世紀イタリア小説と歴史 --ジョヴァン・フランチェスコ  
・ロレダーノ『ディアネーア』を巡って--. 天野恵先生退職記念論文集  
2018: 168-187

ISSUE DATE:

2018-03-29

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233692>

RIGHT:

## 17世紀イタリア小説と歴史

—— ジョヴァン・フランチェスコ・ロレダーノ『ディアネーア』を巡って ——

片山 浩史

### はじめに

イタリア文学における小説と歴史の関係についての議論は幅広く行われてきたが、それは主にマンゾーニを中心とする19世紀の歴史小説以降の作品についてのものである。しかし、1630年代から40年代のヴェネツィアを中心に大きな流行を見せた17世紀の小説においても、小説と歴史、現実と虚構の関係は重要な問題であった。すでに小説の流行はピークを過ぎた1673年に、小説 *Cavaliere d'honore* の序文において小説論を展開したジョヴァンニ・マリーア・ヴェルサーリは、歴史的事実と虚構の関係を基準に《小説 *romanzo*》<sup>1</sup>を3つのタイプに分けた。すなわち「現実離れしたキメラ的なもののみにについて語り、多くはそれを語る著者にしか知られていないことを、名前、場所、時代を変えて偽装した出来事の下に隠したもの以外の真実を含まない」もの、「現実の土台の上に自らの作品を作り上げ、優雅な文体、生き生きとした着想、豊富で多彩な描写、重々しい警句しか付け加えない」もの、「《歴史的眞実 *vero storico*》に《架空の出来事 *favoleggiati accidenti*》を混ぜ、本当ではあるが拡張された物語を編み、そして美德を好み、悪徳を憎むよう教える意図を常に持っている」ものに分けたのである。そして「作り話だけでは読者の信用を損ない、歴史そのままでは、多くの場合、芸術の規則が要求する出来事を含まず」、読者を楽しませると同時に教育することができないので、両者の利点を持った最後のものが最も優れているとした<sup>2</sup>。さらに、人間の物語についてはこの3番目のものを、聖書や聖職者の物語では2番目のものを模倣するのが良いと述べている<sup>3</sup>。

現実と虚構の関係が特に問題となるのは、両者が織り交ぜられた小説においてである。そのような作品としてヴェルサーリの念頭にあったのは、Albertazzi の分類にしたがって《英雄恋愛小説 *romanzo eroico-galante*》と呼ばれるものに違いない<sup>4</sup>。17世紀イタリアにおける小説流行の中心にあったこのジャンルは、16世紀半ばに再発見された古代ギリシャ小説に範をとったもので、ジョン・バークレイ（1582-1621）のラテン語小説 *Argenis*（1621）の大流行によって、ヨーロッパ中に広まった。そのイタリアにおける先駆者は、1624年にヴェネツィアで *L'Eromena* を出版したジョヴァ

<sup>1</sup> *romanzo* の語は17世紀においては散文長編物語文学を指して幅広く使われており、本論では小説と呼ぶこととする。

<sup>2</sup> Versari (1673: 5-6 [in Spera (2008: 123)]).

<sup>3</sup> Versari (1673: 9 [in Spera (2008: 124)]).

<sup>4</sup> Albertazzi (1891) は17世紀小説を《Romanzi “eroici galanti”》、《Romanzi di costumi》、《Romanzi politici》、《Romanzi morali》、《Romanzi storici》の5つのジャンルに分類した。

ンニ・フランチェスコ・ビオンディ（1572-1644）である<sup>5</sup>。ビオンディの小説について、フランチェスコ・ポーナの小説 *L'Ormondo*（1635）に付された序文では次のように述べられている。

かつてアルプスを越えてイタリアに現れた騎士道物語の創作は、若者には大変喜ばれたが、学ある人々の間で高い支持を得ることはなかった。その中には、キメラ的なイメージやバランスを欠いた出来事しか見出せなかったからである。[……] ビオンディ卿はとても優れた作品『エロメーナ』によって、新たにこれら2つのジャンル〔騎士道物語と歴史〕の間に分け入った。偽の名前や架空の出来事を用いた作品ではあるが、真実らしさから決して離れることなく、英雄はどのようなべきか、王家の女性や忠実な臣下には何がふさわしいのか、を非常に上手く描いた。したがって、我々の世紀の読者に、喜ばしい驚きを与えるとともに、卓越した叙事詩に劣らぬ教訓と効用を示し、それを引き出すことを可能にした<sup>6</sup>。

英雄恋愛小説は、王子と王女を主要な登場人物とし、一組または複数組の恋人の別離から再会と結婚に至るまでの波瀾万丈を語る。副次的エピソードを含み、多くの出来事はそれを経験した登場人物の口から事後的に語られるなど、古代ギリシャ小説由来の複雑な構造になってはいるが、陸上および海上の冒険、海賊の襲撃、誘拐、決闘、馬上槍試合、宮廷における陰謀、人物の取り違えなど、登場人物に起こる出来事のレベルでは、騎士道物語など既存のジャンルと表面上大きな違いはない。では、このジャンルの特徴・新しさはいかなる点にあったのだろうか。先の引用箇所では、騎士道物語との違いとして挙げられているのは《真実らしさ *verisimile*》で、この種の小説は騎士道物語と歴史の間に位置するものとされている。この定義は、ヴェルサーリの挙げた3つのタイプのうち、最後のものに当てはまるものである。英雄恋愛小説を歴史と関連させて論じた例はこれだけではない。小説を歴史と叙事詩という2つのジャンルと比較したジョヴァンニ・パッティスタ・マンツィーニの言葉もよく知られている。「Questo genere di componimento, che Romanzo è chiamato da' moderni」（現代人によって小説と呼ばれているこの創作ジャンル）は歴史と同じ目的をもって同じ表現手段を用いるが、詩の長所を持つ分だけ歴史よりも優れている。また叙事詩と同じ規則に従うが、韻文の利点を持たないため創作がより困難である。したがって小説は「la più stupenda, e gloriosa machina, che fabbrichi l'ingegno」（知性が作り出す、最も驚異的で輝かしい装置）であるとして<sup>7</sup>、マンツィーニはこの新しいジャンルと自作品の正当化を行った。

<sup>5</sup> 「後に私の親友となるジョヴァンニ・フランチェスコ・ビオンディ卿の『エロメーナ』、『ドンゼッラ・デステッラーダ』、『コラルボ』が我が祖国に現れた時、イタリアではまだそのような小説は見られなかったため、皆から好評や称賛をもって迎えられました」（Armanni 1674: 294）。

<sup>6</sup> Pona (1637 [cit. in Carminati (2007: 82-83)]).

<sup>7</sup> Manzini (1637: iii).

*L'Ormondo* 序文で、英雄恋愛小説と歴史を結びつける要素として挙げられているのは、「英雄はどのようなべきか、王家の女性や忠実な臣下には何がふさわしいのか」といった政治学的テーマが論じられ、読者はそこから教訓を得られることである。マンツィーニの言う、小説と歴史に共通の目的とはこれを指している。そのような議論は多くの場合、登場人物の間で行われる。両ジャンルに共通の表現手段とは散文あるいは散文による物語という性質のことであろう。もう1つの注目すべき点は、*L'Eromena* が《偽の名前 *nomi finti*》を用いているとの指摘である。このジャンルの嚆矢とされる *Argenis* は、古典古代の地中海諸国を舞台とする物語でありながら、16世紀末から17世紀初頭のフランスを中心とするヨーロッパ諸国を描いた一種の鍵小説であることが、小説出版直後から広く知られていた<sup>8</sup>。1629年に *Argenis* のイタリア語訳を行ったフランチェスコ・ポーナ（1595-1655）は、名前や時代を変えて現実の出来事を描き、そのようにして描かれた実在の人物らに評価を下した例は、バークレイ以前にはペトロニウス以外に見当たらないと言う。

実際の名前を用いて現実の出来事を描く歴史や、架空の名で架空の出来事を描く物語は、これまでに無数の者が生み出してきた。だが、現在のことを何世紀も前のこととして、現実の出来事を純粋な創作として描き、それぞれの人物に悪徳や美徳の評価を与えた者は、わずかしき見出すことができない。おそらく、『サテュリコン』において、架空の人物名を用いてネロ帝とその家族の非行を描いたアルビテル・ペトロニウスのみである<sup>9</sup>。

ビオンディの小説についても、具体的な解釈は提供されないものの、歴史的事実を名前や舞台を変えて描いていると当時から見られていた<sup>10</sup>。したがって、このような歴史的寓意が英雄恋愛小説と歴史を結びつける2つ目の要素として意識されていたと言えるだろう。これは1つ目の要素、すなわち小説において展開される政治論とも深く結びつくものである。時代、場所、名前を変えて描かれているもののほとんどは同時代のヨーロッパの国家や君侯であるため、それらを描く目的は、著者の政治的見解や思想的立場を示すためと考えられるからである。

以上のように、17世紀の英雄恋愛小説をそれ以前の長編物語文学から区別する要素として、真実らしさ、歴史との共通性が指摘され、その具体的な現れとしては小説内に見られる政治的議論や歴史的寓意が挙げられていたことは分かる。しかし、17世紀イタリアにおける小説論は、小説の序文や献辞におけるごく短いものに留まっており、作品の内容に触れたり、具体的な創作理論を展開したりすることはなく、そこから個々の作品の違いを伺い知ることはできない。当然、バークレイやビオンディの

<sup>8</sup> 1627年には解説のための「鍵」の付された版も出版されている。Cfr. Barclay (2004: 3-44)。

<sup>9</sup> Barclay (1629: v)。

<sup>10</sup> *L'Eromena* 英訳 (1632) の訳者序文には、この作品を指して「歴史的な詩作、詩的な歴史記述、あるいは偽名の仮面の下で、実在の人物の嘘のようだが嘘ではない冒険や行為を描くこと」(Biondi 1632: iii) と述べられている。

小説について語られたことが、他の作品にも当てはまるとは限らない。そのため、英雄恋愛小説を中心とした17世紀小説における、小説と歴史、現実と虚構の関係を論じるには、個々の作品を具体的に検討し、それらを相互比較する他ない。筆者は以前、ピオンディの小説三部作 *L'Eromena* (1624)、*La donzella desterrada* (1627)、*Il Coralbo* (1632) における歴史的寓意について論じた<sup>11</sup>。そこで本稿では、*Il Coralbo* の3年後に出版され、ピオンディとも関わりの深い、ジョヴァン・フランチェスコ・ロレダーノの小説 *La Diane* を取り上げる。

## 1. ピオンディからロレダーノへ

イングランドでジェームズ1世に仕えていたピオンディは *Argenis* 出版から間もない1620年代に小説を発表したが、表1に見られるように、イタリアにおいて小説が流行したのは1635年から1655年頃であった。表に示したものは初版点数だが、人気のあった作品は17世紀中に10～20版を数え、ルーカ・アッサリーノの *La Stratonica* のように30版を超えるものもあった。ピオンディやロレダーノの作品など諸外国語へ翻訳された作品も多い。1640年にアッサリーノとジョヴァンニ・アンブロジーヨ・マリーニの2人が各々の作品において、17世紀は《小説 *romanzo*》の世紀であるとの認識を示したことは、その流行のほどをよく示していると言えよう<sup>12</sup>。

表1：17世紀イタリアの小説出版点数（初版のみ）<sup>13</sup>

	1620-	25-	30-	35-	40-	45-	50-	55-	60-	65-	70-	75-	80-	85-	90-	95-	計
Venezia	1	3	5	14	21	6	5	7	7	5	2	3	3	3		1	86
Bologna				2	3	7	4	1				2					19
Milano				1	2	3			3					1	1	1	12
Roma					1	4	2	3					1				11
Genova					1	1	2	2		2	1						9
Napoli						1		1	1	1	2					1	7
その他				1	5	5	2	8		1	2	3		1	1	2	31
計	1	3	9	26	42	16	20	11	11	10	7	3	6	5	2	3	175

最も多くの小説が制作・出版されたのはヴェネツィアであった。そしてその中心にいたのがジョヴァン・フランチェスコ・ロレダーノ（1607-1661）である。ドージェをも輩出した名門貴族の家系に生まれたロレダーノは、1630-31年のベスト流行後のヴェネツィア文化の主導者の一人となり、イタリアだけではなく広くヨーロッパ中で名を知られる存在となる。彼の死後にアントニオ・ルピスの記した伝記では「その偉

<sup>11</sup> Cfr. 片山 (2016).

<sup>12</sup> Cfr. Pedullà (2004: 1); Raffaelli (2010: 6).

<sup>13</sup> Mancini (1970) をもとに作成。

大さが鳴り響かない地域は地球上になく、有徳な人物の間にロレダーノの死に対して海ほどの涙を流さぬ者はいない」とされたほどである<sup>14</sup>。1632年に大評議会議員となって以降、共和国の政治にも関わる立場にあったが、若きロレダーノは文芸・出版活動に特に大きな関心を寄せた。自らが多くの作品を執筆しただけではない<sup>15</sup>。グイード・カゾーニを中心にしてヴェネツィアで結成された *Accademia degli Incogniti* は、ペスト流行のために一時期活動を中止していた。アカデミーの活動再開にあたり、ロレダーノが主催者・パトロンとなり、サン・ザニーボロにある邸がアカデミーの集会所となったのである。

ペスト以前のアカデミーの活動はほとんど知られていないのに対し、以後のアカデミーの活動は非常に活発となる。*Incogniti* と小説の創作・出版活動には非常に大きな繋がりがある。先に名を挙げたピオンディやボーナ以外にも、フェッランテ・パッラヴィチーノ (1615-1644)、ジローラモ・ブルゾーニ (1614c.-1686c.)、マイオリーノ・ビザッチョーニ (1582-1663) など、ヴェネツィアで小説を出版した者のほとんどが *Incogniti* に参加していたほどであり、アカデミー公認の出版業者となったジャコモ・サルツィーナやフランチェスコ・ヴァルヴァセンセのもとから出された小説も少なくない。現段階では仮説に過ぎないが、ペストで衰退したヴェネツィアの印刷業界において存在感を示し、自らの文化的影響力を強めるために、ロレダーノを中心とする *Incogniti* の会員らが新たなジャンルとして推進したのが小説だったと考えることも不可能ではないだろう。このような状況を考えると、アカデミーの主催者ロレダーノが小説流行の初期に出した作品は重要と言えるだろう。これが本稿でロレダーノを取り上げる1つ目の理由である。

2つ目の理由は、パークレイやピオンディの小説とのつながりである。1605年に出された政務停止令をきっかけに、ヴェネツィア共和国はパオロ・サルピ (1552-1623) を思想的指導者として教皇庁と激しく対立した。ダルマツィアの没落貴族の生まれで、パドヴァ大学で法学を修めたジョヴァンニ・フランチェスコ・ピオンディは、この時期からサルピの近くにいた人物である。サルピは、イングランドでは駐ヴェネツィア英国大使ヘンリー・ウォットンやダドリー・カールトン、さらにフランシス・ベーコンやトマス・ホップズ、プファルツでは宮廷の最高顧問アンハルト侯クリスティアン、クリストフ・フォン・ドーナ、他にもフランスのユグノーなどに協力者を持ち、反ハプスブルク・反教皇庁の活動を行っており、ピオンディはそのネットワークの一員であったと考えられている<sup>16</sup>。彼はプロテスタントに改宗後、1610年頃にイングランドへ渡り、ジェームズ1世のもとで外交に携わった。ウォットンらが推進した英国王家とサヴォイア家の縁談のためにトリノへ赴いたり、グルノーブルで開かれたカルヴァン派の会議へ参加したりと、ピオンディは三十年戦争前夜のヨーロッパを駆け回ったが、主な外交活動は英国からプロテスタント諸国への使節としてのもので

<sup>14</sup> Lupis (1663: ix).

<sup>15</sup> Menegatti (2000) に挙げられた出版作品数は18にのぼり、それらの総版数は17世紀だけで250にもなる。

<sup>16</sup> Cfr. Tarpley (2009).



あった。そして、その間にサルピと前述の協力者らの連絡役も担っていたことが、サルピの書簡<sup>17</sup>から窺い知ることができる。前述の通り、このビオンディも会員として Incogniti の名士録に名前を連ねている<sup>18</sup>。彼は国外にしながら、アカデミーの活動にどの程度関与していたのだろうか。イングランド渡航後もビオンディはヴェネツィアに度々立ち寄っていたが、Incogniti との直接的な関係について具体的なことは知られていない。

だが、ロレダーノとビオンディを繋ぐのは、ビオンディが Incogniti の会員であったと名士録に記されていることだけではない。ロレダーノが *La Diane* の執筆にあたって、ビオンディやバークレイの小説に倣ったことは、小説自体から明白である。マクロレベルでは、同じ英雄恋愛小説に分類される通り、古代ギリシャ小説由来の複雑な構造、王子と王女のカップルの別離から再会・結婚までの紆余曲折に満ちた冒険を描くことは、当然のことながら共通している。それだけではなく、バークレイの *Argenis*、ビオンディの小説第一作 *L'Eromena*、ロレダーノの *La Diane* は、いずれも古典古代の地中海の島国を主な舞台としている。また、『オデュッセイア』『アエネーイス』などの叙事詩や『ロランの歌』『狂えるオルランド』『ドン・キホーテ』のような騎士道物語やそのパロディとは異なり、タイトルが女性主人公の名から取られている点を挙げることできる。以上は他の多くの作品にも当て嵌まりうるもので、必ずしも著者が意図的に行なったこととは限らず、そこに大きな意味を見出すべきでないと思われるかもしれない。しかしそうではない。*La Diane* とバークレイやビオンディの繋がりを示す要素は他にも存在するのである。まず、物語の前に置かれた、パオロ・リキエデーイによるカンツォーネでは、アキレウス・タティオス作の古代ギリシア小説『レウキッパとクレイトポン』などと共に *L'Eromena* と *Argenis* の名が挙げられ、*La Diane* がそれらの系譜に連なるものとして読者に提示される<sup>19</sup>。そして、物語の冒頭は *Argenis* へのオマージュとなっている。そのことはポーナによるイタリア語訳と並べれば一目瞭然であり、やはり読者は *Argenis* との関係を意識させられることとなる。

Non era ancora adorata in Oriente la Luna: né l'Impero dell'Asia haveva ricevuto il comando dalla tirannide d'un solo; quando in un'Isola del Mar Carpatio approdò una rinforzata Galea (Diane: 1).

Non haveva il Mondo, per anco, adorato Roma: né l'Oceano, per anco, havea cesso gli honori al Tebro. Quando a' confini della Sicilia, diè fuori uno straniero Vasello (Barclay 1629: 1)

具体的には、同時代の出来事や人物が偽装された形で描かれた歴史的寓意を認識し、

<sup>17</sup> Sarpi (1931: I, 23; II, 7, 140, 144, 155, 157, 166).

<sup>18</sup> Accademia degli Incogniti (1647: 241-243).

<sup>19</sup> Diane: x.

それを解説するように仕向けられるのである。歴史的寓意の存在は、小説の献辞においても仄めかされている。

私は王女ディアネアを描くにあたり、肉でない肉、魚でない魚を良しとしたフィロクセノスの考えが、おとぎ話ではないおとぎ話についても有効であるか試すことを望んだ<sup>20</sup>。

キュテラのフィロクセノスの話はプルタルコス『モラリア』によって知られているもので、ロレダーノに近いところでは<sup>21</sup>、歴史家アゴスティーノ・マスカルディ（1590-1640）の *Discorsi morali su la Tavola di Cebete Tebano*（1627）の第三論考 *Dell'uso, e dell'utilità delle favole nelle cose spettanti alla Religione, ed al costume* でも取り上げられている<sup>22</sup>。マスカルディがそこで古代の寓話の有用性を主張した背景には、古典古代の神話を聖書や聖人などキリスト教の物語で置き換えようとする教皇ウルバヌス8世（在位 1623-1644）の文化政策があった<sup>23</sup>。*Discorsi* はピオンディの小説二作目と同じ年に同じ版元ビネッリから出版されており、ロレダーノと親しいフェッランテ・パッラヴィチーノが *La Dianeja* の翌年に出版した小説 *La Taliclea* の序文においても、この第三論考に言及されている<sup>24</sup>。したがって、ロレダーノが、キリスト教以前の時代を舞台とし、物語に表面上の意味とは別の意味を込めた小説 *La Dianeja* の献辞でフィロクセノスに言及したのは、マスカルディの論考とその主張を意識してのことに違いない。それまで自らの作品に献辞を付したことがなかったと言うロレダーノは、この献辞をドメーニコ・モリーノ（1572-1635）に宛てた。モリーノは、パオロ・サルピやフルジェンツィオ・ミカンツィオ（1570-1654）のパトロンであり、ピオンディとも交流のあった人物である。*Incogniti* の会員となるボーナが1629年に出した *Argenis* のイタリア語訳もモリーノに捧げられている。

さらに重要なのは、ピオンディが小説三部作の中で寓意を通して描いた現実の歴史の続きをロレダーノが語っていることであり、本稿ではそれに注目する。ピオンディの小説三部作の最後にあたる *Il Coralbo*（1632）は、献辞に「予定された6章のうち、

---

<sup>20</sup> Dianeja: ii.

<sup>21</sup> エラスムスも『格言集』の191番「最も素晴らしいことは、陸を航海し、海を歩くこと」で、フィロクセノスの言葉を挙げていた。「プルタルコスは『饗宴』[*mor.* 621d]の第一巻で、よく知られた文句としてこれを挙げています。「陸上を航海し、海を散歩するのはとても好ましい」。最良の選択は正反対の二種を混ぜた形式の使用にあることを意味するものとして理解するのが良いであろう。例えば、笑い話の中に少量の教訓を混ぜたり、真面目な論題と論題の間にシャレを混ぜたりするように。これと非常に似ているのは、プルタルコスが小品「いかに詩人を聴くか」[*mor.* 14e]において引用している、詩人フィロクセノスの次の言葉である。「肉の中で最良のものは肉ではなく、魚の中で最良のものは魚でないものである」。このように、詩と合わされた哲学はより好ましく、哲学と合わされた詩はより注意を引くのである」(Erasmus 2013: 267)。

<sup>22</sup> Mascardi (1638: 31).

<sup>23</sup> Cfr. Bellini (2002: 70).

<sup>24</sup> Pallavicino (1636: v).



書いたのは3章のみです」<sup>25</sup>とある通り、未完の作品であり、主人公らの物語や複数の副次的エピソードは完結しない。その末尾では、主人公コラルボとリンダドーリがサルデーニャに到着した所まで物語が進んだところで、その頃に突然世界を襲った「何千年も見られなかったような混乱」<sup>26</sup>が唐突に語られる。そして、「我々の時代の32年に太陽が白羊宮に入った時までの世界の状況はこのようなものであった。これから何が起るかは、現実の出来事が我々に示してくれるだろう」、コラルボの活躍についても「この筆よりも鋭い他の筆から聞くことになるであろう」<sup>27</sup>と締めくくられている。世界を襲った大混乱は、物語内では、エチオピア奥地の王アルキサンドロによるティンギタナ襲撃が引き起こしたものであるが、ここで描かれているのは、1630年頃から1632年3、4月までの三十年戦争の状況、特にグスタフ・アドルフ率いるスウェーデンによるドイツ侵攻とマントヴァ・モンフェッラート継承戦争である<sup>28</sup>。献辞の日付は1632年4月となっており、ビオンディはまさに進行中の戦争の状況を描いて小説の執筆を放棄したと言える。それはまさに、スウェーデン軍の参戦により勢力を盛り返したプロテスタント側と、1631年に戦線に復帰した傭兵隊長アルブレヒト・フォン・ヴァレンシュタインの率いる皇帝軍が、激しい戦いを繰り広げた時期であり、「これから何が起るかは、現実の出来事が我々に示してくれるだろう」とビオンディが書いたように、戦局の予測は難しい状況であった。しかし、それから約半年後の1632年11月にリュッツェンの戦いでグスタフ・アドルフは戦死、同月にプロテスタント同盟の盟主フリードリヒ5世は病死し、プロテスタント勢力は衰えを見せる。一方、皇帝軍の側でも1634年2月にヴァレンシュタインが皇帝フェルディナンド2世の命により暗殺され、戦争は硬直状態に陥る。*La Diane* (1635)にはこの間の歴史が描かれているのである。

## 2. ロレダーノの歴史作品

ロレダーノが三十年戦争を描いたのは小説 *La Diane* が初めてではない。それ以前に歴史、ノンフィクションとして発表した作品でも、*La Diane* で語られたのと同じ出来事が扱われているのである。Incognitiの会員には、ビオンディ、パッラヴィチーノ、ブルゾーニ、ビザッチョーニらのように、小説と歴史作品のどちらも執筆した者が少なくない<sup>29</sup>。だが、両ジャンルの作品で同じ史実を描いた者は珍しく、小説と歴史の関係を考える上で貴重な例となる。これが *La Diane* に注目する3つ目の理由である。

---

<sup>25</sup> Coralbo: ii.

<sup>26</sup> Coralbo: 187.

<sup>27</sup> Coralbo: 192.

<sup>28</sup> Cfr. 片山 (2016:95-98).

<sup>29</sup> Giovanni Francesco Biondi, *L'istoria delle guerre civili d'Inghilterra tra le due Case di Lancastro e Iorc*; Ferrante Pallavicino, *Successi del mondo dell'anno MDCXXXVI*; Girolamo Brusoni, *Historia d'Italia*; Maiolino Bisaccioni, *Historia delle guerre civili di questi ultimi tempi*; Maiolino Bisaccioni, *Historia universale dell'origine, guerre e imperio de' Turchi*.

ロレダーノが三十年戦争を最初に扱った作品は、1633年に匿名で出版されたわずか16ページの *Lettera di Ragguaglio della battaglia seguita tra 'l re di Svezia e 'l general Volestain, con la morte del medesimo re* (以下略称は *Lettera di Ragguaglio*)<sup>30</sup>である。スウェーデン軍に参加した兵士によって書かれた体裁で、前年11月にスウェーデン軍と皇帝軍の戦ったリュッツェンの戦いとその中で起きたグスタフ・アドルフの戦死を描いたこの本は、この亡くなったスウェーデン王を称賛・追悼するものである。

これほど偉大な王の死は皆の魂をあまりにも恐怖させたため、インクは涙へと変わった。あれほど愛想よく、あれほど寛大で、あれほど偉大な王に対して涙を流さぬものは、その美点を知らぬ者か、その偉大さを妬むものである<sup>31</sup>。

新しい軍隊組織や効率的な戦術を用いて幾度となく皇帝軍を打ち破り、プロテスタント勢力の力を回復させただけでなく、占領した都市のカトリックへも寛容な姿勢を示すなど政治的にも思慮深さを見せたグスタフ・アドルフへの関心や称賛は、ロレダーノだけのものではない。カトリックのイタリアにおいて、プロテスタントの王をはっきりと称えるのは異例のことであったが<sup>32</sup>、教皇庁やスペインへ反感を抱くヴェネツィア、特に Incogniti 界限からは、この王を扱った書物が複数生み出されることとなる<sup>33</sup>。

これだけではない。翌年2月に皇帝側の傭兵隊長ヴァレンシュタインが暗殺されると、ロレダーノは再び非常に短期間<sup>34</sup>で *Ribellione e morte del Volestein* (以下略称は *Ribellione*)<sup>35</sup> を書き上げ、本名のアナグラムに近い Gneo Falcidio Donaloro の偽名を用いて出版する。ここで語られているのは、ヴァレンシュタインの最後の日々、すなわち1634年2月4日から暗殺の実行された25日までの出来事である。ヴァレンシュタインはウィーンからの命を受けた兵士らにより暗殺された。皇帝軍の中心として活躍した傭兵隊長に対するこのような処置を宮廷が決めた理由について、暗殺の直後から様々な憶測がなされた。一番の問題は、ヴァレンシュタインは裏切り者か裏切られたのか。つまり、一種の軍事的クーデターを企てたため暗殺されたのか、彼の成功や

<sup>30</sup> Giovan Francesco Loredano, *Lettera di Ragguaglio della battaglia seguita tra 'l re di Svezia e 'l general Volestain, con la morte del medesimo re*, Venezia, Sarzina, 1633.

<sup>31</sup> MGA: 25.

<sup>32</sup> 「実際、グスタフ・アドルフへの称賛の流行はインコーニティ界限に特有のものである。インコーニティ以前に16、17世紀のイタリアの作者で、プロテスタントの指揮官を大胆にも公然と称えた者はいない」(Spini 1983: 171)。

<sup>33</sup> Luigi Rossi, *Un ferito Cavalliero*, 1632; Galeazzo Gualdo Priorato, *Istorie delle guerre di Ferdinando II e Ferdinando III imperatori e del re Filippo IV di Spagna, contro Gustavo Adolfo re di Svezia e Luigi XIII re di Francia successe dal 1630 al 1640*, Venezia, Bertani e Turrini, 1640; Maiolino Bisaccioni, *Commentari delle guerre successe in Alamagna dal tempo che il re Gustavo Adolfo di Sveta si levò di Norimberga*, Venezia, Bana, 1633-1642. Cfr. Morini (2007); Menegatti (2000: 89-90).

<sup>34</sup> 印刷業者による献辞は同年3月21日付。

<sup>35</sup> Giovan Francesco Loredano, *Ribellione e morte del Volestein, Generale della Maestà Cesarea*, Venezia, Sarzina, 1634.

力を妬んだ者らの悪意の犠牲となったのか、あるいは皇帝自身が力の大きくなりすぎた傭兵隊長を邪魔と考えたのか、ということである。当然のことながら、ウィーン宮廷の公式見解は、ヴァレンシュタインが反逆を企てたため殺害したというものである。このような問題を含んだ事件を語るにあたって、ロレダーノは情報源を示し、客観性を主張する。

では、この帝国で起こりうる中で、あるいはこれまでにドイツが見た中で、最大の反逆をお読み下さい。他の人々の報告に基づき描かれていますが、利害関係にある者や無知な者ではありません。大衆は自分が分かることを語り、偏った者らは自分が望むように語ります。

私は多くの騎士らに協力を求めました。教育を受けており、嘘をつきたくともつけない人たちです。彼らは非常に親切で、時間の許す限りでできるだけ私に情報を与える機会を逃さぬように、書簡さえ送ってくれました<sup>36</sup>。

ロレダーノはいかなる目的で、敬愛するグスタフ・アドルフの敵ヴァレンシュタインについて客観的に語るのだろうか。Malavasi (2015) は、ヴァレンシュタイン暗殺の理由に関するどの解釈が正しくとも結局は皇帝側を貶めることになるため、世間の耳目を集めたこの事件はロレダーノにとって願ってもみない機会だったと言う。

もしヴァレンシュタインが本当に無実であれば、この事件全体が皇帝フェルディナンドの顔に泥を塗ることとなる。宮廷人らに騙されるほど自分の意志がなく愚かである、あるいは、あまりに重要でありあまりに強力になった臣下を「タキトゥスの」悪魔の論理に従って厄介払いするほど腹黒く恩知らずである、と考えられるからである。「タキトゥスの」論理は *Ragion di Stato* (国益) についての書物の中では称賛されるが、それ以外のところでは公には非難される。もし、逆にヴァレンシュタインが本当に裏切り者であれば、グスタフ・アドルフを破った者の評価が土台から崩れることになる<sup>37</sup>。

もちろん、公式見解をそのまま繰り返すのではない。それを直接は否定できないロレダーノは、歴史叙述の客観的な語りを戦略的に用いた。冒頭では「反逆」を語ると述べながら、異なる解釈の可能性を示唆するのである。

叙述は1634年2月4日に皇帝がヴァレンシュタインに対する疑いを持つところから始まる。そのような報告の手紙が届いていたからである。だが、皇帝はそれを議会に伝えないことに決める。「裏切りの露見に気づかれ、先を越されないため、あるいは、あれほど恩を受けた男がそのようないまわしい行いに及ぶと納得できなかったか

<sup>36</sup> MV: 31.

<sup>37</sup> Malavasi (2015: 121-122).

ら」<sup>38</sup>である。このように「……あるいは……」と確言できぬことについて客観的に語る体裁で、ロレダーノは異なる解釈を併置する。皇帝はエッゲンベルク公にだけ相談する。そこで皇帝が最初に語るのは、皇帝の立場への不満・不安である。

恩義が大きいところでこそ忘恩は生じる。人間は偉いほど哀れなものだ。君主らの状況は自分にさえ嫉妬せざるをえない状態に至ってしまった<sup>39</sup>。

相談ののち2人は、「陛下の好意によって築かれ、皆に羨まれたヴァレンシュタインの幸運を破壊するために、敵対する者らがでっちあげた話」<sup>40</sup>との見方に傾く。結局、ヴァレンシュタインの「反逆」を描く話の冒頭で、皇帝の嫉妬、敵対する者らによる策略という、反逆とは異なる真実の可能性が示唆されるのである。

その後、皇帝はヴァレンシュタインの甥であるマクシミリアン公爵<sup>41</sup>を通じて本人にこの疑いを伝えさせ、直属の部下を派遣してヴァレンシュタインの軍を監視させることにする。派遣された者は「すぐにヴァレンシュタインの移り変わった魂と不実な心に気づく。彼の考えは彼の義務以上のもので、野望は皇帝軍総司令の名誉を遥かに超えるもの」<sup>42</sup>と思われた。その主な理由は、勝利を得られる機会に躊躇することである。またヴァレンシュタインがその部下らに署名させた、いかなる状況でも彼に従うという文書も問題視された。こうしてヴァレンシュタインは裏切り者と判断される。公が宿営を置いていたピルゼンの町にその知らせが伝わった時の人々の反応をロレダーノは語る。

皆が本当にこの反逆に驚いており、それに関する意見は利害関係によって様々であった。Alcuni ponderavano（一部の者はこう考えた）。ヴァレンシュタインは皇帝による鼯鼠以外に長所のない貧しい一般人で、男の跡継ぎもおらず、日常的に痛風に苦しめられ、体調の良いのは稀にだけである[……]そのような男が、最も卑劣で邪悪なものとして皆に嫌われ、非難されるこのような行為を企てるわけがない。

Altri discorrevano diversamente（別の考えを述べる者もいた）。皆に妬まれれば必然的に自らの生命の安全をどうにかして確保せざるをえない。皇帝の好意は、公の力を恐れる者らの悪意ある報告によって妨げられる。皇帝の恩寵を失うくらいなら、死の手に落ちる方がましである。一度命令する立場を享受した者は、もはや一般人としての生活に耐えることはできない。

---

<sup>38</sup> MV: 31-32.

<sup>39</sup> MV: 32.

<sup>40</sup> MV: 32.

<sup>41</sup> これ以後に語られることから、バイエルン公マクシミリアン1世を指しているのは明らかであるが、彼はヴァレンシュタインの甥ではない。ヴァレンシュタインの実の甥の名もマクシミリアンであるため、混同があったように思われる。

<sup>42</sup> MV: 33.

公の敵らの文書や作り話は、公を絶望させる以外の目的を持っていない。恐れや軽蔑は誠実な繋がりから人間を引き離すのである。自らの命を危険から守るには、あの文書に頼る他なかったのであり、そこには皇帝への奉公を否定する内容は含まれず、自らの安全を求めているだけである<sup>43</sup>。

このように人々の異なる意見を紹介することは、客観性を求める歴史叙述においては自然なことである。だが、国家による公式の解釈が存在する場合、様々な見方を併置することはそれを相対化し、公式見解の存在意義を否定することとなる。このような語りの戦略が用いられているのは、今挙げた箇所だけではない。結末部においても、ヴァレンシュタインの破滅の原因として、彼自身の傲慢や野心に、皇帝の嫉妬が併置されている。

[ヴァレンシュタインは] 帝国の最重要任務を託され、それを非常に慎重に実行し、大きな勲功を挙げたため、彼を妬む者でさえ称賛せざるを得なかった。享受した栄誉はその奉公の証であり、その力によって皇帝の守護やドイツの安全に不可欠となったのである。

欠かせぬ存在となったことが、彼の心を傲慢へ、皇帝の心を妬みへと傾けたのである。君主が臣下の力を恐れる必要は決してなく、臣下は君主の寵愛を悪用してはならない。したがって、皇帝にとって自分が必要な存在だと信じたヴァレンシュタインが野望で満たされ、大きな野心を抱く彼を見るうちに皇帝の中で恐れが満ち溢れたため、ヴァレンシュタインの破滅と死が早まったのである<sup>44</sup>。

タイトルは公式見解に従った《反逆と死 *Ribellione e morte*》であり、客観性を主張してはいたが、ウィーン宮廷の見解を相対化するこの作品は、すぐにヴェネツィア共和国の官憲の目に留まる。1634年7月29日、国家の重職を担うロレダーノがこのような著作を公にしたことを問題視した国家調査官らは、「今後はこのような行いを控え、公人に求められることを常に考えるように」命じた<sup>45</sup>。こうして同時代の現実をそのままの形で語ることが不可能となったロレダーノが、その翌年に初めて試みた小説が *La Diane* であり、そこではグスタフ・アドルフやヴァレンシュタインのことが再び語られるのである。

### 3. *La Diane* (1635)

*La Diane* は *Argenis* やビオンディの小説と同じように、古代の地中海諸国を舞台とした王子と王女の恋と冒険の物語である。

---

<sup>43</sup> MV: 37.

<sup>44</sup> MV: 46.

<sup>45</sup> Menegatti (2000: 121).

表 2 : *La Diane* の主な登場人物

国名	人物
クレタ	王子 Astidamo (Diaspe や Hidraspe の偽名でも登場) 王子 Celardo
キプロス	王 Vassileo 王女 Diane
ヌミディア	王女 Arelida 王女 Ariama
トラキア	王 Amuritte 王弟 Dorcone (兄の死後に王となる)
ネグロポンテ	王 Dinanderfo 王女 Floridea フィレーナ公 Viralto ラッシマーノ公 Prodirto
モロッコ	王子 Oleandro 王女 Arnalta

表 2 に示したような複数の国の王子・王女の物語が、それを体験した登場人物自身によって別の登場人物に対して語られるため、非常に複雑な構造となっているが、語りの順を度外視して簡単に整理すると以下ようになる。物語の中心は、キプロスのディアネーアとネグロポンテのフロリデーアという 2 人の美しい王女を巡る争いである。2 人のクレタ王子アスティダーモとチェラルドはディアネーアの肖像画を見て、揃って彼女に恋をする。それが原因で喧嘩をした 2 人は、本物の彼女に会うためにキプロスへ向かう。そしてディアネーアは父王の決めた相手ではなく、身分を隠したアスティダーモを愛するようになる。トラキア王アムリッテも強引にディアネーアを手に入れようとするが、アスティダーモにより殺害される。娘の恋を知らぬ王は、次のトラキア王ドルコーネの求婚に応じるように命じるが、彼女は拒否し、アスティダーモへの愛を告白する。激怒した王は娘の処刑を命じる。それを知ったドルコーネは怒り、軍を率いてキプロスを攻める。終章（第 4 章）はキプロスを舞台とした戦争にあてられている。ディアネーアが処刑を逃れ、生き延びていると知ったアスティダーモは、クレタ軍と共にキプロスに戻り、トラキアを打ち破る。ディアネーアとアスティダーモの結婚・出産で小説は幕を閉じる。もう 1 人の女主人公であるネグロポンテ王女フロリデーアはヴィラルトを愛している。プロディルトは王位を狙って彼女に言い寄るが、拒絶される。そこでプロディルトは王を殺害し、首都を掌握する。しかし、ヴィラルトが軍を率いて戻ってきたため、フロリデーアを連れて海に出るが、嵐で船はキプロスに漂着する。その間に、フロリデーアが死んだものと思ったヴィラルトは、ネグロポンテを出て、キプロス軍の総司令となっていた。トラキアとの戦争の中でヴィラルトが行方不明となったことを知ったフロリデーアは、彼を探して敵陣にまで赴く。その彼女を騙して連れ去ろうとしたプロディルトを、そこへ偶然あらわれたヴィラルトが殺し、2 人が再会を喜び合うところで、フロリデーアの物語は終わる。もう 1 つの主要なエピソードは、モロッコとヌミディアの物語で、誘拐されたモロッ



コ王女アルナルタとその兄オレアンドロの再会、オレアンドロとヌミディア王女アリーアーマの恋、妹の恋人オレアンドロに恋した王女アレリーダの悪巧みとその失敗、がその主な内容である。主にこれら3つの物語の主人公らが偶然出会い、人違いが原因で争ったり、助け合ったり、お互いの身の上話を語ったりする形で、小説は進行する。

このような小説の中で、前述の三十年戦争の歴史が偽装して描かれているのは、第2章の冒頭で王女フロリデーアがディアネーアに対して語る自国ネグロポンテの物語(Dianeā: 69-77)においてである。そのことは古くから知られていた。Gryphius (1710: 166) には、この小説の歴史的寓意を解くための鍵が、ビオンディの *L'Eromena* に關するものと共に挙げられている<sup>46</sup>。それを多少補うと表3のようになる。

表3：ネグロポンテのエピソードの人物・地名と実際の人物・地名

Dinanderfo, Re di Negroponte	Ferdinando (皇帝フェルディナンド2世)
Duca di Lovastine	Volestain (傭兵隊長ヴァレンシュタイン)
Duca di Vimara	Bernardo di Sassonia-Weimar
Prodirto, Duca di Lassimano	Massimiliano (バイエルン公マクシミリアン1世)
Collaterale Picomeni	Ottavio Piccolomini
Conte di Lagasso	Matteo Galasso (Mathias Gallas)
Lodafo, Re dei Vesati	Adolfo, Re di Svetia (グスタフ・アドルフ)
Re delle Gaule	スペイン王フェリペ4世
Duca di Riafe	Duca di Feria (Gómez Suárez de Figueroa y Córdoba)
Prencipi di Catanosa	マティアス・デ・メディチ フランチェスコ・ディ・コージモ2世・デ・メディチ
Monarca dei Belgi, degli Aquitani, e de i Celti	フランス王ルイ13世
Zenilt	Litzen (リュッツェン)
Beotia	Boetia (ボヘミア)

実在の人物や地名の単純なアナグラムを多数用いた著者に、隠す意図はほぼ全くない。このようなアナグラムの使用は、パークレーやビオンディと異なるものである。ビオンディはアナグラムをほとんど用いておらず、パークレーがアナグラムを用いたのは主に自分の友人らを表す人物にであり、一種のオマージュや遊びとしてであった<sup>47</sup>。また、表3に挙げられた人物のうち、この部分以外にも登場するのはディナンデルフォとプロディルトのみで、登場人物と実在の人物の対応関係が有効なのは、ほぼ

<sup>46</sup> «IOHANNES certe FRANCISCUS LAUREDANUS, senator Venetus magni nominis, in venustissima fabula, cui *Dianeae* nome imposuit, insidias a Wallensteinio Ferdinando II structas, operose delineat. Ubi rex *Dianderfus* est Ferdinandus; rex *Vesatorum*, Gustavus; dux *Lovastinus*, Wallenstein; *Zenilt*, LiBen; rex *Gallorum*, rex Hispaniarum; dux *de Riafe*, Feria; principes *Catanosae*, magni Hetruriae ducis fratres; monarcha *Belgarum*, Aquitanorum & Celtarum, rex Galliae; comes *Lagassus*, Gallassus; *Boetia*, Bohemia. Et FRANCISCUS BIONDUS in *Eromena*, proxime ad Argenidem Barclaii accedente, calamitates Friderici & Elisabethae coniugis graphice depingit»

<sup>47</sup> Cfr. Barclay (2004: I, 45-48).

この短いエピソードに限ってのことである<sup>48</sup>。その点では、ロレダーノはビオンディの小説第二、第三作に倣ったと言える。

ここで語られる歴史的出来事は、*Lettera di Ragguaglio* と *Ribellione* で語られたもの、すなわちリュッツェンの戦いにおけるグスタフ・アドルフの戦死からヴァレンシュタインの暗殺にいたる経緯である。10 ページ程度に短くまとめられているため、省略された細部はあるものの、語られる出来事やその順はほとんど変わらない。具体的には、傭兵隊長に対する皇帝の疑い、疑惑を確かめるために行われた甥や部下の派遣、臣下に自らへの忠誠を誓わせた文書など隊長の反逆を裏付けるとされた証拠、反逆の公表と罷免、暗殺などが語られる。だが、それらを語るのは、*Ribellione* のように客観性を主張する著者ではなく、小説の登場人物フロリデアである。そのため、*Ribellione* の語りの特徴であった複数の解釈や意見の併置は少なくなる。ネグロポンテ王ディナンデルフォ（＝皇帝フェルディナンド2世）の娘フロリデアやその恋人ヴィラルトは、実在の人物を表してはいない。そのため彼女の口から語られる解釈は、実在の人物の立場を反映したものではなく、著者ロレダーノのものだと考えられる。*Ribellione* との重要な違いは、ヴァレンシュタインが反逆を疑われ始める時点にある。ロダーフォ（＝グスタフ・アドルフ）の死により、ロヴァスティーネ（＝ヴァレンシュタイン）の率いるネグロポンテ軍が勝利したとの知らせが宮廷に伝わる。

この知らせは宮廷に伝わると、それぞれの欲望に応じた受け止め方をされた。我々の安全や我々の国家の安定のための頼みの綱はこの勝利のみであったため、王の支持者らはそれを喜んだ。だが、我々の破滅の上に自らの望みを築き上げるのを待っていた者らは、それを特別な感情を持って受け止めた。そしてそれを、ロヴァスティーネ公が我が父より受ける恩寵を失わせることに向けた。父は信じられないほどのお人良しであったため、騙されているとは思わず、他人が自分を騙そうとするとさえ考えていなかった<sup>49</sup>。

このように、ロヴァスティーネも王も悪意ある者らに騙されたと語られるのである。それに気づいたロヴァスティーネは対策を考える。

公爵はしばらくは自身の任務を続け、素晴らしい手柄を上げたが、敵対する者らが彼の考えにもない罪さえも彼に着せていることを知ると「……」自衛のための何らかの保証を考え始めた<sup>50</sup>。

---

<sup>48</sup> 全体が鍵小説となった *Argenis* では、具体的な史実への参照が意味を持つのはあくまでも事例としてである。*Argenis* のタイトルは女主人公の名から取られているが、ラテン語 *regina*（女王）のアナグラムに接尾辞 *-is* を付け加えてギリシャ語風にしたものであり、マキアヴェッリ『君主論』やカスティリオーネ『宮廷人』に倣ったもの、つまり一種の君主論であることを示す題と考えられている。Cfr. Barclay (2004: 24).

<sup>49</sup> Dianea: 72.

<sup>50</sup> Dianea: 73.

こうして、疑惑の対象となった、部下に忠誠を誓わせた文書なども、反逆の証拠ではなく自衛策であったことになる。だが結局、*Ribellione* で語られたように、それらを反逆の証拠とし、ロヴァステイーネは裏切り者として暗殺される。ここまでのこのエピソードで語られる現実の歴史である。皇帝については、*Ribellione* で仄めかされた嫉妬よりも《人の良さ *bontà*》が強調され<sup>51</sup>、それにつけこんだ悪意ある臣下らの策略によって、ヴァレンシュタインが殺されたとの解釈が示されている。ここではその悪意ある臣下らについて具体的に語られてはいないが、フロリデーアの語る話はこれで終わりではない。フロリデーアにとっては、ここまでは我が身に起こったことを語るための前置きに過ぎないのである。前述の通り、フロリデーアは実在の人物を表してはいない。*La Dianea* では、ビオンディの小説第二、第三作とは異なり、現実を偽装して描いた物語の続きとして、現実とは関係のない物語が語られている。

そこで前面に出てくるのは、ロヴァステイーネの甥ラッシマーノ公プロディルトである。プロディルトは、ディナンデルフォがロヴァステイーネの暗殺とその部下2人の投獄で済ませたことに抗議する。

ロヴァステイーネの甥であるラッシマーノ公のみが、おじの罪を強調し、王の安全や畏敬の犠牲としてたった1人の命だけで満足するのは穏健過ぎるとして、我が父を非難した。たとえ、王の敵と通じていたこと以外の罪がなくとも、それだけであらゆる刑を受けるのに値すると言うのである。この故意の誇張は、人の良い我が父の心を掴んだ<sup>52</sup>。

このようにして王の信頼を得たプロディルトは、王女フロリデーアに言い寄るが、彼女はヴィラルトを愛している。そこで、あらすじとして紹介したように、プロディルトは王を殺害し、フロリデーアを誘拐するが、最終的にはヴィラルトに殺されるのである。ディナンデルフォがプロディルトに殺されるように、皇帝フェルディナンド2世がバイエルン公マクシミリアン1世に殺されたという史実はなく、フロリデーアやヴィラルトにあたる人物は実在しない。語られていることは現実とは無関係である。だが、その直前まで、登場人物を実在の人物と対応させながら物語を読んできた読者はどのような印象を受けるだろうか。プロディルトにあたるマクシミリアン1世こそが、皇帝を騙してヴァレンシュタインを破滅に追いやった張本人とを感じるはずである。そもそも、*Prodirto* (プロディルト) の名前自体がラテン語《裏切り者 *proditor*》の非常に単純なアナグラムとなっている。それだけではない。小説は *In medias res* の技法に従って、ネグロポンテから王女フロリデーアを無理やり連れ出したプロディルトの船が、嵐でキプロスに漂着するところから始まる。そこでフロリデーアがプロディルトに対して発する最初のセリフで、プロディルトは《裏切り者 *traditore*》と呼

<sup>51</sup> ディナンデルフォの人の良さはエピソードの冒頭でも強調されている。「王の称賛すべき多くの性質の一つに人の良さがあつた。そのために、受けた侮辱を忘れ、彼を憎む者らを信じがたい寛大さで愛することが度々あつた」(*Dianea*: 69)。

<sup>52</sup> *Dianea*: 77.

ばれるのである。

公爵、私はあなたに返事したくありませんでした。裏切り者の言葉は返事に値しないからです<sup>53</sup>。

つまり、小説の最初からプロデイルトが裏切り者だと明言されているのである。ロレダーノは現実の歴史を偽装して描いた部分だけでなく、完全にフィクションの部分をも上手く利用して、実際の出来事に関する自らの解釈を示したと言えるだろう。

## おわりに

ロレダーノは *Ribellione* を国家により咎められ、同時代の歴史を直接描く作品を書くことができなくなったのであった。そのことは小説内でモロッコ王子オレアンドロが語る言葉にも表されている。

所有者であったメシモラン公爵が、妬みあるいは自らの落ち度によって traditore（裏切り者）とされ、不名誉な舞台でその命と名声に終止符をうったため、この邸が国庫に徴収されているのを見た私は、金に糸目を付けず手に入れたのです。すると、チェラルドは非常に興味を持って、その公爵の生涯についてより具体的なことを聞きたがった。

そこでオレアンドロは続けた。あらゆる口を黙らせるほど偉大であった君主の行いは、それを語る者の気持ちに応じた非常に不確かな形でしか、詮索しえませんが、権力者は彼らに憐れみや怒りの感情を引き起こすような記憶を埋没させておきたがります。語られた者による検閲にあわぬためか、際限なき権力を持つ者への敬意によってか、人がそれを語ることを許しません。君侯について語ることは常に危険を伴います。ふつう、権力者の耳に真実は嫌われるからです<sup>54</sup>。

そして、同時代の歴史について語る欲求とその危険の間でロレダーノが選んだジャンルが小説であり、ノンフィクションでよりも大胆に自らの解釈を示したのである。1632年にドメニコ・モリーノに宛てた書簡でバルダッサレ・ボニファーチョも「数年早くパークレイの『アルゲニス』によって付けられた足跡を辿って、[ビオンディは]フィクションの装いのもとに実際の君主らの姿を用心深く描き、彼らの行動の動機や利害を非常に巧みに表したので、君主らはそれに気付くことができないか、気付いても怒りをあらわにすることができません」<sup>55</sup>と述べており、小説は直接語るのが危険なことを描きうるジャンルと考えられていたことが分かる。

---

<sup>53</sup> Dianea: 3.

<sup>54</sup> Dianea: 34-35.

<sup>55</sup> Sanna (2011: 69).

しかし、ロレダーノが *La Diane* に描きこんだ現実、本稿で見たような三十年戦争における君侯の行いに関するものだけではない。自伝的要素、ヴェネツィアやローマに関するものなどが知られているが、解明されていない要素も多数存在する。それらについては今後研究を進め、稿を改めて論じることとしたい。

## 文献一覧

### 【テキスト】

Giovan Francesco Loredano

Dianeia *La Diane*, Venezia, Sarzina, 1635.

MGA *Lettera sulla morte di Guastavo Adolfo II Re di Svezia*, in *Morte del Volestein e altre opere*, a cura di Luca Manini, Lavis, La Finestra, 2015, 25-29.

MV *Morte del Volestain*, in *Morte del Volestein e altre opere*, a cura di Luca Manini, Lavis, La Finestra, 2015, 30-50.

Giovanni Francesco Biondi

Eromena *L'Eromena*, Venezia, Pinelli, 1628.

Donzella *La donzella desterrada*, Venezia, Pinelli, 1628.

Coralbo *Il Coralbo*, Venezia, Pinelli, 1635.

### 【引用参考文献】

Accademia degli Incogniti

1647 *Le Glorie degli Incogniti ovvero gli huomini illustri dell'Accademia de' Signori Incogniti di Venezia*, Venezia, F. Valvasense.

Albertazzi A.

1891 *Romanzieri e Romanzi del Cinquecento e del Seicento*, Bologna, Nicola Zanichelli.

Armanni V.

1674 *Delle Lettere*, vol. III, Macerata, Giuseppe Piccini.

Barclay J.

1629 *L'Argenide di Giovanni Barclaio tradotta da Francesco Pona*, Venezia, Gio. Salis.

2004 *Argenis*, a cura di Mark Riley e Dorothy Pritchard Huber, *Bibliotheca Latinitatis Novae / Medieval and Renaissance Texts and Studies*, 273, 2 voll, Assem, Royal van Gorcum.

Bellini E.

2002 *Agostino Mascardi tra 'ars poetica' e 'ars historica'*, Milano, Vita e Pensiero.

2007 *Agostino Mascardi: teoria e prassi della scrittura storica (note sulla Congiura del conte Gio. Luigi de' Fieschi)*, in Clizia Carminati e Valentina Nider (a cura di), *Narrazione e storia tra Italia e Spagna nel Seicento*, Trento, Università degli studi di Trento, Dipartimento di studi letterari, linguistici e filologici, 109-140.

Biondi G. F.

1632 *Eromena, or, Love and revenge*, tradotta da James Hayward, London, Richard Badger.

Carminati C.

2007 *Narrazione e storia nella riflessione dei romanzieri secenteschi*, in Clizia Carminati e Valentina Nider (a cura di), *Narrazione e storia tra Italia e Spagna nel Seicento*, Trento, Università degli Studi di Trento, Dipartimento di studi letterari, linguistici e filologici, 37-108.

- Erasmus da Rotterdam  
 2013 *Adagi*, a cura di Emanuele Lelli, Milano, Bompiani.
- Getrevi P.  
 1986 *Dal picaro al gentiluomo. Scrittura e immaginario nel Seicento narrativo*, Milano, Franco Angeli.
- Gryphius C.  
 1710 *Apparatus sive disputatio isagogica de scriptoribus historiarum seculi XVII illustrantibus*, Lipsiae, apud Thomam Fritsch.
- Invernizzi D.  
 2016 *L'Argenis di John Barclay (1582-1621) e la sua influenza sul romanzo italiano del Seicento*, tesi di dottorato, Università Cattolica del Sacro Cuore, a.a. 2015-2016.
- Lattarico J.-F.  
 2012 *Venise Incognita. Essais sur l'Académie libertine du XVIIe siècle*, Paris, Champion.
- Lupis A.  
 1663 *Vita di Gio. Francesco Loredano*, Venezia, Francesco Valvasense.
- Malavasi M.  
 2015 *Per documento e per meraviglia. Storia e scrittura nel Seicento italiano*, Ariccia, Aracne.
- Mancini A. N.  
 1970 *Il romanzo nel Seicento. Saggio di bibliografia*, in «Studi secenteschi», XI (1970), 205-274 e XII (1971), 443-498.
- Manini L. (a cura di)  
 2015 *Giovan Francesco Loredano, Morte del Volestein e altre opere*, Lavis, La Finestra.
- Manzini G. B.  
 1637 *Il Cretideo*, Bologna, Giacomo Monti.
- Mascardi A.  
 1638 *Discorsi morali di Agostino Mascardi su la tavola di Cebete tebano*, Venezia, Gio. Pietro Pinelli.
- Menegatti T.  
 2000 «Ex ignoto notus». *Bibliografia delle opere a stampa del Principe degli Incogniti: Giovan Francesco Loredano*, Padova, Il Poligrafo.
- Miati M.  
 1998 *L'Accademia degli Incogniti di Giovan Francesco Loredan (1630-1661)*, Firenze, Olschki.
- Morini A.  
 2007 *Gustavo Adolfo dalla storiografia alla narrazione*, in Clizia Carminati e Valentina Nider (a cura di), *Narrazione e storia tra Italia e Spagna nel Seicento*, Trento, Università degli studi di Trento, Dipartimento di studi letterari, linguistici e filologici, 223-249.
- Pallavicino F.  
 1636 *La Taliclea*, Venezia, Sarcina.
- Pedullà A. M.  
 2004 *Il romanzo barocco ed altri scritti*, Napoli, Liguori Editore.
- Pona F.  
 1637 *L'Ormondo*, Venezia e Macerata, Per gli eredi del Salvioni ed il Grisei.
- Raffaelli A.  
 2010 *Appunti sul rapporto tra libri, intellettuali e lettori nel Seicento italiano*, in «Testo e senso», N° 11, 2010 <<http://testoesenso.it/article/view/5/12>> (Ultimo accesso: 13 dicembre 2017).



Sanna S.

- 2011 *Londra 1632: discussioni linguistico-letterarie tra Giovan Francesco Biondi e Baldassare Bonifacio*, in Clizia Carminati e Stefano Villani (a cura di), *Storie inglesi. L'Inghilterra vista dall'Italia tra storia e romanzo (XVII sec.)*, Pisa, Edizioni della Normale, 43-82.

Sarpi P.

- 1931 *Lettere ai protestanti*, a cura di Manlio Duilio Busnelli, Bari, Laterza, 2 voll.

Spera L.

- 2008 *Verso il moderno. Pubblico e immaginario nel Seicento italiano*, Roma, Carocci.  
2014 *Due biografie per il principe degli Incogniti. Edizione e commento della «Vita di Giovan Francesco Loredano» di Gaudenzio Brunacci (1662) e di Antonio Lupis (1663)*, Bologna, I libri di Emil.

Spini G.

- 1983 *Ricerca dei libertini*, Firenze, La Nuova Italia.

Tarpley W. G.

- 2009 *Paolo Sarpi, his networks, Venice and the coming of the Thirty Years' War*, PhD dissertation, Washington D.C., The Catholic University of America (UMI Number: 3361343).

Versari G. M.

- 1673 *Cavaliere d'honore*, Velletri, Cafasso.

片山浩史

- 2016 「ジョヴァンニ・フランチェスコ・ピオンディの小説に含まれる歴史的寓意について」、『イタリア学会誌』第66号、77-105.